

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号： 32677
 研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2008 ～ 2012
 課題番号： 20500560
 研究課題名（和文） アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対
 抗言説・戦略
 研究課題名（英文） The Myth/Stereotype of Black athleticism and Discourses and Strategies
 against Sport Fixation in the USA
 研究代表者
 川島 浩平（KAWASHIMA KOUHEI）
 武蔵大学・人文学部・教授
 研究者番号： 60245446

研究成果の概要（和文）：

「黒人」に固有の運動能力があるとする言説や表象を、「神話」/「ステレオタイプ」と規定し、それが現代の日米社会において流通するメカニズムの一端を、日米大学生の経験（「人種」/「黒人」という言葉・概念との遭遇、学校教育での学習）に関する聞き取り調査によって明らかにした。さらに、この神話/ステレオタイプが、日米両国の19世紀から20世紀へと続く歴史的展開において、形成され、伝播される原因と過程の一端を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This project defines the discourse/representation of “blacks as natural athletes” as a “myth” or “stereotype,” and has clarified at least part of the process of its wide circulation in contemporary societies of Japan and US through a research based on interviews with college students on their life courses concerning their encounter with words and concepts of “race” and “blacks” and their education at school. This project also reveals at least part of the causes and processes in both countries as to why and how the myth/stereotype emerged and spread in history from the nineteenth to twentieth centuries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：スポーツ人類学/アメリカ研究

科研費の分科・細目：人類学・スポーツ人類学

キーワード：アメリカ合衆国、黒人、アフリカ系アメリカ人、運動能力、スポーツ、人種、ステレオタイプ、日米関係

1. 研究開始当初の背景

(1) ステレオタイプ・神話の浸透

① 『ベルカーブ』

人種間の知能差を計測する試みによって大論争を引き起こした『ベルカーブ』という書

籍がある。その著者の一人チャールズ・マレーは、アフリカ系アメリカ人（以下黒人）が集団として築いてきた優れた業績として、多くのアスリートを挙げている。

② 黒人アスリートの活躍

この指摘は、最近スポーツ界を騒がせた黒人選手を思い起こせば、容易に頷くことのできるものである。1試合に81得点をたたき出したプロバスケットボール選手コービー・ブライアント、ハンク・アーロンが持っていたメジャーリーグ通算本塁打記録755本を塗り替えた主砲バリー・ボンズ、世界陸上大阪大会において100M、200M、400Mリレーの三冠を達成した走者タイソン・ゲイなど、その例は枚挙にいとまない。

③ジャーナリズム言説

他方、ジョン・エンタインは、著書『黒人アスリートはなぜ強いのか』において、幾重もの留保をつけながらも、卓越した黒人身体能力を形成する決定的な要因は遺伝子にあると主張する。この書籍が読者に、「黒人」＝「天性のアスリート」というイメージを植え付ける上で果たした役割も見逃すことはできない。

(2) 学界からの対抗言説

①ジョン・オグブ

しかし運動能力を、黒人に宿る天賦の才であるかのように祭り上げる風潮を鋭く批判した研究者の存在も忘れてはならない。とりわけ合衆国では、黒人運動能力の遺伝説を科学的根拠のない風説や神話に基づくものであるとして、また黒人の若者を異常なまでにスポーツへと駆り立て、いたずらにアスリートとしてのキャリアを志向させる元凶として、しばしば告発し、厳しい批判の標的とする動きがみられた。その中で先駆的役割を果たしたのは、社会学者ジョン・オグブである。彼は運動競技熱が、学業面での黒人児童の落ちこぼれを非常に多く生み出していると警鐘を鳴らした。

②ジョン・ホバマン

ジョン・ホバマンは、多数の黒人青少年が、スポーツを成功のための唯一の道と信じ込み、他の進路に目もくれず、過度の情熱と努力を注ぎ込む現象を一種の病理であるとみなし、それを「スポーツへの固執(フィグゼーション)」と呼んだ。この病理がもたらした弊害の一つに、弁護士や医師のような黒人専門職保有者は、黒人プロ選手よりもはるかに多いのに、社会におけるイメージや表象としてはほとんど目立たないことがあげられる。

(3) 黒人アスリートをめぐる環境の変化

ホバマンの警告が各界を巻き込む大論争を巻き起こしてから、丸10年が経過した。この10年間に合衆国や世界を舞台とするスポーツ界は様々な変化に見舞われ、勢力図の塗り替えも進行した。変化の一端は、次のような現象にも窺える。合衆国のプロスポーツ組織のなかでも、抜きん出て超人的黒人アスリ

ートを輩出してきたNBA(全米バスケットボール協会)は、国際化の渦に巻き込まれ、黒人のロールモデルが数的にも、比率的にも減少するという現実直面している。MLB(メジャーリーグ)では、中南米系やアジア系の一流選手が急増している。世界陸上では、末續慎吾や劉翔といったアジアのトップアスリートが、黒人アスリートの牙城を脅かしつつある。

(4) 本研究の要請

また筆者による現地調査は、合衆国の大学生の間でも身体能力神話が存在するとはいえ、学生たちの多くがそれを突き放して、批判的に見る視点を共有していることを明らかにしている。労働階級や中産階級の黒人のなかには、フィグゼーションの魔力に抵抗して、子供たちに他分野での文化的、知的関心を植え付けようとする運動に取り組むものが少なくない。今や私たちは、これらの変化を受けて、ホバマンの警告の意義と有効性を再検討する必要に迫られているのである。

2. 研究の目的

(1) 現代日米社会における「神話」/「ステレオタイプ」受容/流通過程の検証

①大学生の意識への注目

大学生に対して、彼ら・彼女らがこの世に生を受けてから現在まで、いかにしてこの想定を獲得し、言説や表象を受容してきたのかを問い、その上で20年間あまりのそれぞれの人生において、神話と遭遇し、その影響を受ける上で重要な段階や制度を特定し、経験の実際をアンケートと聞き取り調査によって掘り起こす作業をおこなう。

②3つ問題領域の設定

神話との遭遇や交渉が展開する上で主要な位置を占める人生の段階と制度について、試験的な聞き取り調査の結果を踏まえて、3つの問題領域を設定するものとする。

第1は、インフォーマントが実際に黒人といふ、なぜ、いかに出会い、いかなる関係を持ったかである。幼少期におけるこのような経験は、神話と相対した際の立場や態度の決定に少なからぬ影響を与えたものと推測できる。

第2は、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念をいつ、なぜ、いかに出会い(聞き)、これを習得して、使用するに至ったかである。これは普通、第一領域での経験より後に発生したものと考えられるが、実際の経験を整理し、理解する上で不可欠のプロセスである。

第3は、第2の領域と深く関わるが、その制度的側面に重点をおいたものである。すなわち、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念を、学校制度による教

育カリキュラムを通じて、いつ、いかに学んだかである。

(2) アメリカにおける「神話」／「ステレオタイプ」の歴史的形成／浸透過程の検証
同形成／浸透過程を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から、とりわけスポーツ大国として、これまで多くの「黒人」アスリートを産出してきたアメリカ合衆国（以下アメリカ）の占める役割と位置に注意を払いつつ、明らかにする

(3) 日本における「神話」／「ステレオタイプ」の歴史的形成／浸透過程の検証
同形成／浸透過程の日本における起源と形成・普及の過程を検証する。

3. 研究の方法

(1) 現代日本社会における「神話」／「ステレオタイプ」受容／流通過程の検証
日米の比較的な枠組において、アンケートとインタビューに基づく質的調査によって、現在を生きるインフォーマントのライフヒストリーをたどりつつ、一人ひとりが積み重ねてきた経験のデータから、神話に対するポジションの固有性が生まれる原因を明らかにする。

(2) アメリカにおける「神話」／「ステレオタイプ」の歴史的形成／浸透過程の検証
一次、二次資料（新聞、書簡、書籍、自伝、研究書、一般書等）に基づき、奴隷制度が存在した19世紀前半から現代にいたるまで、黒人の身体と運動能力がどのように観察され、理解され、評価されてきたかを検証し、「神話」的、「ステレオタイプ」的な言説や表象が出現する契機を特定し、その原因を分析する。さらにこのような言説や表象がいかに変容し、誇張、曲解、強調を経て広く流通した過程を検証し、その原因を解明する。

(3) 日本における「神話」／「ステレオタイプ」の歴史的形成／浸透過程の検証
明治以降の近現代の日本史をさかのぼり、身体能力において「黒人」を頂点とする「人種」的序列（あるいは「人種」的ヒエラルヒー）の意識や思考が構築される時期・時代とその環境に分析の眼を向ける。近現代という歴史的文脈に立ち入ることによって、(2)にあげた歴史的な一次・二次資料に基づき、「神話」の形成過程を段階的あるいはより立体的に炙り出す。

4. 研究成果

(1) 日本人大学生の対「黒人」関係
比較的皮相的、刹那的であり、関係性が低

く浅いインフォーマントほど、「黒人」観はステレオタイプ的である。逆に関係性が直接的で深いほど、「黒人」観は多様で、個人的な性質や性格を反映したものになっている。

(2) アメリカ人大学生の「人種」／「黒人」との遭遇経験

①3つのレベルでの展開

アメリカ人インフォーマントの語りは、次第に深まり発展する、3つのレベルにおいて遭遇と習得の経験が展開したことを示唆する。

②レベル1：相違に対する関心の方向付け
第一に、多民族国家の構造の中で必然的に生じる「他者」との遭遇を契機として、そこで生じる「相違」に対する関心を方向付け、秩序付ける際の意識の動きのレベルがある。この時、動員される言葉・語彙が「人種」であり「黒人」であったことは、多くのインフォーマントの語りからも明らかである。自分は「人種」的に誰で、何者なのか。「他者」は「人種」的に誰で、何者なのか。両者の差異をどのように理解し、説明するのか。教育の現場で取り込まれるずっと以前から、家族や幼年期の仲良しグループの中で、アメリカ人はこの課題に直面する。

③レベル2：集合的な広がりを経験

第二に、インフォーマントの語りは、こうした意識の動きにおける自己と「他者」の位置づけが、個人レベルだけでなく、というより個人レベルを越えて、ある程度の集合的な広がりを行いながら成されていることを窺わせる。それは、エスニック集団としての自覚と認識を促す制度的な表象システムが日常的、恒常的に発動しているからである。たとえば黒人にとっては、マーティン・L・キング生誕日や黒人史月間などが制度的な表象システムの最たる事例であり、こうした記念行事は集団的なアイデンティティの拠り所として、またそれを保証する装置として人種意識を高揚させずにはおかない。その結果、人種的な差異は個人のものであると同時に、集団間の境界線として認知され、理解されることになる。

④レベル3：集団間上下秩序の構築

第三に、こうした集団間の差異は、常に何らかの基準の下に解釈され、評価され、その結果として集団間の上下関係を意識的にせよ、無意識的にせよ規定するような契機を伴う可能性と緊張をもたらしていることに留意したい。言い換えるなら、遭遇と習得の経験は、人種やエスニック集団間の区別や差別とほぼ不可避的に連動せざるを得ない。ここでいう区別や差別は、日本人インフォーマントの語りにみられたような個人レベルでのポジ対ネガの印象といった表層的な意識の動きではなく、社会の構造と秩序においてそれぞれの集団全体を配置するような、規模が大

大きく、根の深い意味合いを有するものである。それゆえ、遭遇・習得者の人間観や世界観に影響を及ぼしかねない強い意味合いを兼ね備えている場合も少ない。まただからこそ、危険な傾向として糾弾され、対抗するイデオロギーの構築を促し、あるいはタブーとして文化の底流に潜んでしまうことになる。ここでいう区別や差別には、「黒人」はスポーツで「うまい」・「速い」とする言説や、居住区を指して「あそこには近寄るな」と論ず言説なども含まれる。

(3) 日本人大学生の「人種」／「黒人」との遭遇経験

①多様なイメージの交錯

「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得では、とりわけ「人種」と比較した場合、はるかに多様な情景描写がなされ、様々な状況や場面で言葉が発せられ、様々なイメージや表象が行き交い、また構築されていることがわかる。

②正負一方向に集約できない好悪感情併存
そこで交錯するのは、肯定と否定、積極と消極、ポジとネガとして対置しうる好悪感情である。正負一方向に集約しきれない異質な要素の混在状況が成立しているといえる。これは、幼少期のインフォーマントたちが「黒人」という言葉・概念に遭遇し、それを習得した時の、心理面での無秩序と混乱を反映している。そこに投影される「黒人」イメージの基調に潜むのは、スポーツ競技での卓越と栄光、それらに対する憧れ、羨望、好意であると同時に、実際の人間関係、つまり家族の歴史に蓄積されてきた記憶と価値観、友人とのやりとりで学んだ、地域社会のネットワークに根付く閉鎖性、隣人としての接触で生じる違和感など、対立し、矛盾する印象、意見、判断、評価などの共存である。

③接触の稀薄さと印象の浅薄さ

ほとんどの語りにおいて、当の黒人は、より親密な関係を築き得る環境に存在せず、相互理解を促すような接触が生まれる可能性は欠如している。メディアで映し出されるスポーツ選手や芸能人は実在感の希薄な遠い存在であり、家族や友人の語りに登場する「黒人」もまた「ちびくろサンボ」や「土人」など記号的な意味合いが強い場合が多い。「実際に見て」あるいは「隣人」として「黒人」を意識する場合でさえ、近い存在として言及されている例は皆無に近い。こうした、内実ある経験を提供する機会が欠如した文化的環境では、もし制度的なシステムによってステレオタイプが生産された場合、それに対抗する知が作動し得ないのも当然である。

(4) 日本における小学校・中学校での「人種」／「黒人」観の定着

①中学校地理教育の影響

「人種」・「黒人」という言葉・概念との遭遇の場を提供した授業は様々であるが、とくに中学校での社会科地理的分野での、異なる「人種」に関する影響が大きい。

②地理教育の特徴

固定的な、あるいは定型的なメディアであり、基準を用いて、「世界の人々の生活や環境の多様性」および具体的な地域や国におけるその展開の様子に着目させることが、地理的分野の内容であり、延いては「地理的な見方や考え方」を形作るものということになる。この時、つまり固定的、定型的なメディアおよび基準を用いて地球上にみられる人類とその生活様式の多様性を全体的、あるいは個別的に捉えようとするとき、学習者のまなざしはおのずから弁別的あるいは分類的になり、そこに映し出される対象もまた固定安定的で静定型的なものとなることは避けられない。

③「人種」導入の便宜

そこで重宝されるのが、人類の多様性を整理する基準であり、人類の中に境界線を引く道具である「人種」である。日本人の「人種」認識における、学知として継承されてきた三人種分類の影響を強調しすぎることは不可能である。

(5) アメリカにおける「神話」／「ステレオタイプ」の歴史的形成過程

①「不可視」の時代

19世紀末に成立した人種分離主義体制の下、黒人アスリートは「不在」あるいは「不可視」とでもいうべき状況におかれ、きわめて稀な存在であった。この時代に黒人アスリートは、知的にも身体的にも「劣った人種」とみなされ、プロとアマを問わず、スポーツ界とは縁遠い立場におかれていた。

②変動の1910年代、1920年代

しかし、1910年代まで続く「革新主義」時代の諸改革を経て、黒人のスポーツ参加を促す環境は着実に整備される。義務教育や社会教育の場での運動競技施設は新設、増設、拡充され、「大移動」で北上あるいは西進した黒人家族の子女たちに、スポーツに参加し、技能を磨き、上達させる好機を提供した。

③起源としての1930年代

スポーツという新興産業は実力主義で、非白人にも門戸を開く傾向が強かった。その結果、1930年代になって黒人選手は急速に、比率的、数的に増加し、台頭した。黒人身体能力に関する生得説の出現とステレオタイプの生成は、こうした急激な変化の副産物であった。

④第二次世界大戦後の浸透

第二次世界大戦後のジャッキー・ロビンソンのデビュー以後、一部の競技種目における黒人選手の集中は白人に「優越」する印象を与

え、生得説とステレオタイプは常識化し、定説であるかのごとく社会に流通するようになった。

(6) 優れたアスリートが誕生する4要素

①個人の属性

当事者はだれか。才能と資質、能力と性格などの属性、および部族、血族、家族、エスニシティ、民族、人種などのアイデンティティによって規定される集団的属性など。仮に遺伝的要因が、こうした集団にあるレベルまで優れた運動能力を生み出す資質を共有させたとしても、その影響は一般に信じられているよりは小さい。またその集団の境界の特定は困難である。

②時間・時代的文脈

それは、年、年代、世紀など暦による機械的な区分であると同時に、民主主義、人種分離主義、白人至上主義、帝国主義など諸々の時代において優勢な体制やイデオロギーと結びついている。

③地理・空間的文脈

それは大陸および大陸内部の地方や地域、国家や連邦など行政的、人為的につくられた単位であると同時に、郊外か都心か、隣接の地方、国家の政治経済事情が安定しているか否か、山地か海沿いか、高地か低地、平均気温/湿度/気圧は高いか低いかなど、人文地理、自然地理的な環境的条件を含む。

④現象が発生する契機となる状況や事情

それは、プランテーションの家父長制下の奨励や命令、帝国主義者による指導や訓育、ナショナリズムによる国威発揚、グローバル資本主義下の競争など、当事者の生きた時空のなかで政治、経済、文化、社会面の諸力が衝突、連動、総合されて形づくられる。

(7) 日本における「神話」/「ステレオタイプ」の歴史的形成過程

1930年代にロサンゼルス五輪やベルリン五輪、日米対抗陸上などの国際運動競技会を通じて日本人は黒人身体能力と遭遇することになる。他方、第二次世界大戦、太平洋戦争の勃発に備えた軍事国家構築の過程で、精神主義を強調する体育教育が浸透するに及び、精神の日本人、身体のアフリカ人という二項対立的なステレオタイプ理解が、ひろく一般市民に浸透していくことになる。当時のこうした意識の高揚のなかに、黒人身体能力神話の起源を見出すことができる。それは、精神対肉体に付随する序列関係、あるいは序列意識を必然的に伴うものであり、それゆえ優越する大和民族、劣位にあるアフリカ民族という上下関係の感覚を醸成するものでもあった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計9件)

1. 川島浩平「帝国日本における『黒人身体能力』との遭遇と人種・民族秩序の再編成」『現代スポーツ評論』査読無 27 2012年 100-108

2. 川島浩平『『黒人身体能力神話』の受容—『人種』/『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に—』京都大学人文科学研究所『人文学報』査読有 第100号 2011年 77-112 <http://hdl.handle.net/2433/148032>

3. 川島浩平「黒い肌の『異人種』との遭遇—『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として—」『武蔵大学総合研究所紀要』査読無第18号 2009年 1-21 <http://hdl.handle.net/11149/460>

4. 川島浩平『『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる—概念規定と方法論を中心に—』『武蔵大学人文学会雑誌』査読無第40巻 2009年 1-29

<http://hdl.handle.net/11149/844>

他5件

[学会発表] (計19件)

1. 川島浩平 “The Japanese Track and Field Community Encounters African American Athletes: A Perspective on Racial Formation in Imperial Japan during the 1930s,” Institute for the Study of Societal Issues, University of California, Berkeley, USA, 2013年2月20日

2. 川島浩平 “The Racialization of Athletic Ability in Japan during the 1930s: Track and Field Community and the Rising Generation of African-American Athletes,” Sport and Society Conference, Cambridge, UK, 2012年7月24日

3. 川島浩平 “Japan Encounters the “Black Race”: Japanese Marathon Runners and Algerian-French Gold-Medalist El Ouafi in the Amsterdam Olympics of 1928,” North American Society for Sports History, Berkeley, California, 2012年6月3日 USA

4. 川島浩平 “The 1928 Amsterdam Olympic Marathon and the Racialization of Athleticism in Japan,” International Society for the Social Sciences of Sport, Olomouc, Czech Republic, 2011年9月24日

5. 川島浩平 “Nationalism, American Identity, and the Emergence of the Myth of Black Athleticism during the 1930s” 北米スポーツ史学会 (North American Society for Sport History) 2010年5月29日フロリダ州オーランド USA

6. 川島浩平『『黒人身体能力』神話の歴史性の検証—水泳、陸上競技、アメリカンスポ-

ツを事例に一」日本スポーツ人類学会年次大会 2010 年 3 月 29 日 沖縄県名護市名桜大学

7. 川島浩平 “An Old Myth in the New Age? Transformation of Ethnic/Racial Discourses and Representations of Athletic Talent and Performance in the Era of Global Sports (Part 2)” 「スポーツと社会」国際学会 2010 年 3 月 9 日ブリティッシュコロニア州バンクーヴァー カナダ

8. 川島浩平 「アメリカ合衆国における『黒人身体能力』神話とその起源—中国、日本との比較文化論の可能性を求めて—」中国清華大学アジアスポーツ人類学会 2009 年 11 月 22 日 北京市 中国

9. 川島浩平 “An Old Myth in the New Age? Representations of Athletic Talent/Performance and Transformations of Ethnic/Racial Discourses in the Era of Global Sports (Part 1)” 北米スポーツ社会学会 (NASSS) 年次大会 2009 年 11 月 8 日オンタリオ州オタワ カナダ

10. 川島浩平 “Looking at ‘Superior’ Black Athletes during the Era of White Supremacy in Search of the Origin of a Myth” ジョージア州立大学歴史学部招待講演 2009 年 9 月 11 日 ジョージア州アトランタ USA

11. 川島浩平 “Experiences of College Students and the Formation of Racial Discourses in Japan” ミズーリ大学カンザスシティ校歴史学部招待講演 2009 年 9 月 9 日ミズーリ州カンザスシティ USA

12. 川島浩平 “Searching the 1920s for Early Manifestations of a Myth: Fritz Pollard, Paul Robeson, and ‘Natural’ Black Athleticism” 北米スポーツ史学会 (NASSH) 年次大会 2009 年 5 月 23 日 ノースカロライナ州アッシュヴィル USA

13. 川島浩平 「『神話』以前の『半神 (デミゴッド)』たち—1910~20 年代におけるフリッツ・ポラードとポール・ロブスン—」日本スポーツ人類学会 2009 年 3 月 30 日早稲田大学

14. 川島浩平 「黒人アスリート表象の再構築—近年の『氏対育ち』論争再燃の中で—」京都大学国際シンポジウム 2008 年 12 月 05 日 京都大学

15. 川島浩平 “Japanese Perspectives on the Myth of ‘Black’ (African American) Athleticism” 北米スポーツ社会学会 (NASSS) 2008 年 11 月 06 日デンバー コロラド州 USA

16. 川島浩平 “The Globalization of American Sports Culture and the Myth of Black Athleticism” 韓国アメリカ学会 (ASAK) 2008 年 10 月 24 日ソウル国立大学 韓国

17. 川島浩平 “Representing ‘Black Athletes’ in Contemporary Sport Cinema” 国際スポーツ社会学会 (ISSA) 2008 年 7 月 27 日 京都大学
他 2 件

〔図書〕(計 2 件)

1. 川島浩平 『人種とスポーツ——黒人は本当に「速く」「強い」のか』中央公論新社 2012 年 254 ページ。
2. 川島浩平 「第 11 章 人種表象としての『黒人身体能力』——現代アメリカ社会におけるその意義・役割をめぐって」岩波書店竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』2009 年 290-314

〔その他〕

ホームページ等

<http://racism-sport.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 浩平 (KAWASHIMA KOHEI)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：60245446